〈NFRJ の確立〉にむけて 1 —NFRJ08 実施にあたって—

嶋　﨑　尚　子

〈NFRJ レポート〉のねらい

全国家族調査 National Family Research of Japan（以下 NFRJ）は，日本家族社会学会の活動として全国家族調査委員会が中心となって，全国確率標本調査を実施しているプロジェクトである。本プロジェクトの活動状況，結果ならびに方法論に関する議論や情報を学会員に広く報告し提供することは，NFRJ の責務と考えている。このたび本誌に〈NFRJ レポート〉コーナーを開設し，定期的に NFRJ 成果などの情報を発信し，学会内で共有していただく機会を得ることができた。会員の皆様へ NFRJ を周知する機会として活用し，家族研究における計量的研究の促進へとつながることを願っている。

本号では，「〈NFRJ の確立〉にむけて」と題して，2009 年 1 月に実施した「第 3 回全国家族調査 (NFJR08)」を題材に，3 論考を掲載する。まず，NFRJ の現況と NFRJ08 実施概要（嶋﨑）について紹介し，ついで NFRJ08 から導入するパネル調査のねらいとデザイン（西野）ならびに，NFRJ08 調査票作成上の検討事項およびプリテスト方法（島・品田・田中）をとりあげる。次号以降，NFRJ08 結果速報などを報告していく予定である。

I. 〈NFRJ の確立〉とは

1. 運動としての NFRJ

NFRJ プロジェクトは，現代日本における家族のあり方や戦後にたどった変遷，将来の姿について，信頼できる共通のデータを用いて議論することの必要性の高まりから始まった。これまでに 2 回の「全国家族調査」(NFRJ98, NFRJ03) を実施し，2009 年 1 月には第 3 回調査 (NFRJ08) を実施したところである。

本プロジェクトの目的はいうまでもなく，現代日本の家族の動向，いま家族がどうあって，どこにむかっているのかを精確にとらえることにある。NFRJ は，この目的を大前提に，全国家族調査の具体的な方法とねらいとして，①全国確率標本による，日本の家族の的確な現状把握，②継続調査による変動・趨勢分析が可能になるようなデータ・セットの構築，③データの公開・共同利用による共通分析基盤の拡大と，他の家族関連統計データの公開促進（石原，2001）の 3 点を掲げてきた。

その後の経緯や成果については，すでにこれまで本誌上での特集や研究動向などで再三紹介してきたが，再度以下に概略しておく。1998 年 12 月に 28～77 歳の男女 10,500 名を標本抽出し，1999 年 1 月に「第 1 回全国家族調査 (NFRJ98)」を実施し，その 5 年後には同じデザインで NFRJ 03 を実施した。その分析成果として，『現代家族の構造と変容』(2004) ならびに『現代日本人の家族』(2009) の 2 冊の論文集が刊行された。NFRJ 98 ならびに NFRJ03 データは，現在，東京大学 SSJDA アーカイブに寄託・公開され，共同利用に提供されている。

17 年間にわたる NFRJ プロジェクトの経過をふりかえると，現代日本の家族趨勢を NFRJ データによって実証的に研究しその成果を蓄積することよりも，その前段階にある全国家族調査の方法論的ねらいの実現や達成に傾注してきたといえ

しまざき　なおこ：早稲田大学

る。すなわち，NFRJは全国確率標本データを構築し，共同利用にむけ公開すること，そして多くの研究者に利用してもらうことをめざした壮大な運動プロジェクトとしての性格が濃いものであった。まさに,「家族に対する根本的な問いを可能とする環境の一端を整えること」（正岡，2001）をめざした運動であったといってよいだろう。NFRJは運動としての側面が意識され，強調されてきたのである。このことは，前掲書『現代家族の構造と変容』への書評（本誌第17巻第1号特集）において，評者の盛山和夫氏が「手段と目的の顛倒」（盛山，2005）として指摘されたこととも合致し，また，同セッションで盛山氏・直井氏・目黒氏の三氏ともが指摘している「家族はどうなっているのか」への適切な回答が見いだせないとの批判へもつながる。

こうした批判自体はもっともであるが，一方では，NFRJプロジェクト始動時期である1992年9月時点での日本の社会科学におけるデータ文化（データの公開，共同利用，二次分析に対する認識状況）を想起すれば，運動としての側面が強調されることは，時代的要請として必然であったと考えてよいだろう。

実際，1990年代には，日本でもようやくSSJDAといったデータ・アーカイブ構築の動きが急速に展開していった。NFRJは，この動きと同調していたのみならず，その原動力のひとつとして作用したとも自負している（西野，2001）。2009年現在，データ公開・利用をめぐっては，「誰でも良質なデータを手に入れることができるようになり，計量的な研究を『やろうと思えばできる』状況」（稲葉，2007）を迎えるにいたった。この間の実務的なタスクと苦労については，稲葉(2007)に詳しいが，膨大なエネルギーと経費が投入されたことを忘れてはならない。

2. 〈NFRJの確立〉へ

NFRJは，第3回調査であるNFRJ08実施という段階に到達した現在，ようやく，これらの批判への回答，すなわち当初の目的を課題としてプロジェクトを前進することが可能になったのである。

こうした段階を〈NFRJの確立〉と呼びたい。〈NFRJの確立〉にむけた歩みは，①3回の定点調査を実施することで，トレンドを把握することがようやく可能となったこと，②それと関連して，時代・社会的コンテクストを含むデータの確立に到達したこと，③パネル調査を導入し，個体水準の変動を視野に入れることが可能となったこと，以上の3点から確認できる。NFRJ08は，上記3点において分岐点となる重要な局面であると位置づけられる。実際，NFRJ08は，〈NFRJの確立〉を強く意識して，準備され，実施されてきたのである。ここにきてNFRJは，その時代的コンテクストを組み込むことがいよいよ可能となったのである。NFRJ本来の課題を，現代日本の家族像を提示すること，NFRJデータによる計量研究成果を蓄積し，それを社会的に還元することにあることを再確認することが重要である。

II. NFRJプロジェクトの現況

1. NFRJ08の実施

「第3回全国家族調査」は2009年1月から実施している（本稿執筆時点で実施中である）。実施概要は，表1のとおりである。2008年秋以降の急激な経済状況の悪化が，実査にどのような影響を及ぼすのか，緊迫感をいだきつつ臨んでいるところである。

NFRJ08は，継続調査であることからNFRJ98ならびにNFRJ03との連続性を担保することを大前提に調査設計をすすめた。すなわちNFRJ調査は，世帯ではなく個人を単位とし，個人にとっての家族を観察し，各人が保有する特定の親族的位置（配偶者，父，母，子，きょうだい，義理の父，義理の母など）の相手ごとに，同一質問項目を用いてその関係を測定するという基本デザインを堅持している。

しかしながらいくつかの変更を行った。まず最も大きな変更として，対象者の年齢範囲の上限

表 1　NFRJ08 の概要

	NFRJ08	NFRJ03	NFRJ98
調査時期	2009 年 1 月～2 月	2004 年 1 月～2 月	1999 年 1 月～2 月
調査方法	自記式・留置法	自記式・留置法	自記式・留置法
対象者	28～72 歳男女	28～77 歳男女	28～77 歳男女
計画標本	9,400	10,000	10,500
地点数	480	583	535
回収標本	実施中	6,302	6,985
回収率	実施中	63.0%	66.5%
実査委託機関	(社)中央調査社	(社)中央調査社	(社)中央調査社

を，77 歳から 72 歳へと 5 歳引き下げた。これは予算規模の縮小からの苦渋の選択であった（予算確保の困難については，稲葉，2007 を参照のこと）。さらに，調査票を 3 種（若年，壮年，高年）に分けたこと（複数調査票の作成方法については，保田，2007 を参照のこと），さらに，NFRJ08 回答者のうち若年・壮年対象者に対してパネル調査への応諾を求め，パネル調査という枠組みを組み入れたことの 2 点も特筆すべき変更点である。後者については，本レポート第二論考で詳述する。

むろん，NFRJ の連続性は，調査項目の連続性なくしては無理である。前回調査である NFRJ03 は，NFRJ98 の基本項目を継続したが，いくつかの項目では大幅な変更を実施した。たとえば，子どもやきょうだいといった複数該当者がありうる親族的位置については，NFRJ98 では，2 種の方法が混在していた。すなわち，個別対象（たとえば年長子）との関係を測定する方法とカテゴリー全体（子ども全員）との関係を測定する方法である。NFRJ03 では，前者の方法に統一した（嶋﨑，2006）。

こうした経過を踏まえて，NFRJ08 では，調査項目全般についての精査ならびに項目を公募するなどして，NFRJ 調査票の最終版の確定に努めた。その際，個人がもつ家族関係に関する基本データを収集することを重視する一方で，研究者の関心や分析上での活用頻度も考慮に加えることとした。具体的には，NFRJ98, NFRJ03 調査項目の利用頻度をひとつの指標とし（松田，2007），さらに会員から調査項目を公募した（詳細は第三論考）。また，具体的な調査票の作成にあたっては，モニタリング法によるプリテストを行い，実査場面における評価を受け，実査用の最終調査票を確定した。プリテストの実施は，第三論考でも触れているように，NFRJ にとって貴重な機会となった。

2.　NFRJ の課題

以上のように，NFRJ プロジェクトは〈NFRJ の確立〉にむけ展開している。最後に，NFRJ の課題を整理しておきたい。NFRJ08 を実施するうえで直面している課題については，すでに稲葉 (2007) が，予算獲得の困難と実査の困難として整理している。そこで指摘された困難は，NFRJ08 を実施した現在でも残念ながらほとんど解決されていない。今後の調査実施上の課題として，中長期的に検討していくことになる。検討課題のみを具体的に指摘しておくと，予算獲得にむけては，海外を含めたデータ利用の拡張（具体的には ICPSR へのデータ寄託，海外ジャーナルへの研究論文の投稿など），その成果の還元と蓄積が肝要である。実査場面では，社会調査全般がかかえる課題のほかに，NFRJ では実務を担当する若手研究者の育成と世代継承の問題が深刻であることを加えておきたい。

さて，すでに述べたように，NFRJ08 の実施によって，NFRJ はトレンド分析とコーホート分析（出生コーホート単位での趨勢分析）が可能となった。その概要は表 2 のとおりである。最後に，この 2 種の分析枠組みを用いる際に検討すべ

表 2　NFRJ におけるトレンド分析とコーホート分析のデザイン

出生コーホート	NFRJ98		NFRJ03		NFRJ08
1976–80				トレンド分析	28–32 歳
1971–75		トレンド分析	28–32 歳		33–37 歳
1966–70	28–32 歳		33–37 歳		38–42 歳
1961–65	33–37 歳		38–42 歳		43–47 歳
1956–60	38–42 歳		43–47 歳		48–52 歳
1951–55	43–47 歳		48–52 歳		53–57 歳
1946–50	48–52 歳		53–57 歳		58–62 歳
1941–45	53–57 歳		58–62 歳		63–67 歳
		コーホート分析		コーホート分析	
1936–40	58–62 歳		63–67 歳		68–72 歳
1931–35	63–67 歳		68–72 歳		
1926–30	68–72 歳		73–77 歳		
1921–25	73–77 歳				

き喫緊の課題を提示して，本稿を終えたい。1998 年から 2008 年までの社会変動・社会的コンテクストの精査である。この精査は，いうまでもなくトレンド分析・コーホート分析において必須であるが，多くの社会調査プロジェクトでは，残念ながら軽視されがちである。たとえば，NFRJ98 が実施された 1998 年は，1990 年代前半から「少子高齢社会」の到来が指摘され，女性の結婚や出産への関心が最も高まった時期であったことなど，データ解釈においては重要な視点である。NFRJ プロジェクトが日本家族社会学会の事業として実施されていることの利点のひとつは，社会的コンテクストの精査を学会員とともに検討していく機会にある。そうした議論の場としても本レポートを活用していきたい。

【文　献】

藤見純子，西野理子編，2009,『現代日本人の家族―NFRJ からみたその姿』有斐閣.

稲葉昭英，2007,「全国家族調査の困難：第 3 回全国家族調査の実現にむけて」『家族社会学研究』17(2): 99–105.

石原邦雄，2001,「NFR98 と現代日本家族の分析―中間的成果と今後の課題―」『家族社会学研究』13(1): 9–20.

正岡寛司，2001,「家族変動と新しいスタイルのデータ―「全国家族調査」(NFR) 研究の発進―」『家族社会学研究』13(1): 21–33.

松田茂樹，2007,「全国家族調査の質問項目の使用頻度」『家族社会学研究』17(2): 113–120.

目黒依子，2005,「書評セッション　家族社会学における計量分析の期待と課題」『家族社会学研究』17(1): 20–24.

直井道子，2005,「書評セッション　高齢者研究の視点からの書評」『家族社会学研究』17(1): 15–19.

西野理子，2001,「データ・アーカイブの視点からみた NFR98」『家族社会学研究』13(1): 35–45.

盛山和夫，2005,「書評セッション　データを分析することの意味」『家族社会学研究』17(1): 10–14.

嶋﨑尚子，2006,「家族への実証的接近―「全国家族調査」NFRJ の意義と可能性―」『社会学年誌』47: 35–52.

渡辺秀樹，稲葉昭英，嶋﨑尚子編，2004,『現代家族の構造と変容―全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析―』東京大学出版会.

保田時男，2007,「NFRJ08 における複数調査票の作り方」『家族社会学研究』19(2): 106–112.